

● 「キレやすい子」の増加が示すもの

平成21年度の文部科学省の調査（平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」、平成21年11月発表、文部科学省 HP より）によると、小・中・高校の校内での暴力行為の数が6万件に迫っています。なかでも、対教師暴力が8,120件と、前年度比約15%増（平成21年）になっています。また、生徒間暴力は32,445件、器物損壊も17,329件といずれも増加しています。

子どもが変わってきているのか、子どもに対応する親や教員の力が不足しているのか、子どもを育て受け入れる社会が変わってきているのか、原因は多岐にわたるでしょう。いずれにしても、キレやすい人たちやキレさせやすい人たちは、自分の気持ちを上手に相手に伝えることや、相手の気持ちを理解することが苦手なようです。

● 本書に求められた課題

2002年に拙著『キレやすい子の理解と対応』（ほんの森出版）を出版してから、私はアンガーマネージメントについての講演や研修を数多く手がけることになりました。それらには、大別すると次の2つの流れがあります。

1つは、学校内における「予防教育」への要請です。

この要請に沿って、キレにくい子どもを育てるためには、どのような感受性やソーシャルスキルを身につけさせればよいのかという予防教育の視点に対応するために、『キレやすい子へのソーシャルスキル教育—教室でできるワークと実践例』（ほんの森出版、2007年）を出版しました。

もう1つの流れは、何度もいじめを繰り返したり、暴力的になってしまったりする子どもたちや、少年、成人に対してどのように対応すればよいかという相談です。

このように、繰り返し暴力を振るったり、いじめを繰り返したりしてしまう人には、なんらかの発達障害や精神的な病理があるのではないかとされることもあります。

確かに、知的障害、発達障害、人格障害、精神疾患、アルコールや薬物依存、虐待の家庭に育ったということは、暴力を起こしやすいハイリスク要因の一つではあります。しかし、早期

に特性を理解して療育が行われたり、本人が自覚してコントロールする力を身につけていれば、ストレートに問題行動に結びつくわけではありません。

私に対応した、いわゆるキレやすい人たちのケースの中には、発達障害であるのに何の対応もされていないために二次的障害を併発しているケースや、非行少年や、ボーダーラインパーソナリティ障害や、アルコール依存の成人男性もいました。しかし、大多数は、「普通」の人々でした。

本書執筆のきっかけは、前述の拙著を発行して以来、個別のアンガーマネジメント・プログラムをどのような方法と手順で実施すればいいのを知りたいという要請が急増したことです。学校の先生をはじめ、いじめや非行を繰り返す子どもたちへの対応に苦慮する専門家の方々からの要請でした。また、ADHD、高機能自閉症など発達障害のある児童・生徒が学校で起こす不適応に対するIEP（個別指導計画）と併用して、こうした子どもたちが集団生活や周囲との人間関係に適応するためのスキルの習得が必要とされているからです。

さらに、少年院、少年刑務所、更生保護等でも、処遇困難な少年たちに対応されている専門家自身が逆ギレさせられかねないケースの相談も増えました。いずれの場合も、アンガーマネジメント・プログラムを実施していく上で、面接での行き詰まりを相談される先生やカウンセラーの方が少なくないのです。

アンガーマネジメントは、認知行動療法を元にしていますが、「気づき」や「感情的な受容」においては、「直面化面接」が必須となります。アンガーマネジメント・プログラムを遂行するためには、本人が自分の課題に気づき、心底から自分の状態を変えたいという気持ちになる必要があるからです。

● 3つの章でお伝えしたいこと

本書は、いじめ、暴力、非行などを繰り返す人への個別対応のためのアンガーマネジメント・プログラムを紹介しています。

第1章では、「アンガー」とは何か、アンガーに結びついた衝動性を引き起こすメカニズムについて詳述し、個別アンガーマネジメントの流れの概要を示しました。

第2章には、個別対応のための構造化された5つの課程について詳述し、各段階で用いられる面接技法を紹介しました。また、アンガーマネジメント・プログラムを進める上で留意し

なければならないポイントを説明しながら、仮の事例にもとづいた面接演習のワークを設定しました。面接中の面接者のリスクを回避するためのポイントや、対象者の気持ちを理解するための傾聴の仕方についても具体的に述べました。

第3章は、いじめを繰り返す子ども、発達障害のある子どもなど、タイプ別のアンガーマネジメントの事例集です。事例は、読者が面接の逐語を読みながら、タイプごとにどのように面接を進めればいいのか、ノンバーバルな表現の読み取りなども含めて、一緒に学べるように構成してあります。

「アンガー」は、著しい行動となって表れることもありますが、特別な人にだけ起こるというわけではありません。日常の親子のいさかいや、学校での先生の指導とのいきちがい、友達とのコミュニケーションの不全など、さまざまな形で誰にでも小さな「アンガー」が生じることがあります。こうした小さな「アンガー」への対応の仕方が、子どものコミュニケーション能力や、気持ちの切り換えなどの感性、また周囲とうまくつきあっていく社会性を育て、大きな「アンガー」を予防していくことにもつながります。

混沌とした感情を整理し、自分らしい感情表現を築き直していくという特徴のある本書の個別アンガーマネジメントが、専門家のみならず、家庭で日々わが子の暴力や暴言に対応しなくてはならない家族の方々にも参考になることを願っております。

*なお、本書の事例等に登場する人物はすべて仮名であり、事例には趣旨が損われない範囲で修正を加えてあります。

2010年7月

本田 恵子